



土居光知著

古代伝説と文学

岩波書店刊行

古代伝説と文学

1960年7月30日 第1刷発行 ©

¥950

著 者 土 居 光 知

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都千代田区神田一ツ橋 2ノ3

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします 精興社印刷・三水舎製本

はしがき

もう半世紀も昔のことである、私は東大の学生として英文学を学んでいた頃、シエリ、キーツ、バイタアの詩や論文に誘われて、ホメロスやその他ギリシアの神話伝説に興味をもつようになった。ちょうどそのころから、クレタ島およびその他のところで考古学のための発掘がさかんに行なわれるようになり、*Journal of Hellenic Studies* 誌上で報告せられ、それらの研究を綜合したクックの *Zeus*、エヴァンズの *The Palace of Minos at Knossos* のような大著述が出るようになったので、私の興味もこれらの研究に誘われて、更に古い時代と場所へ——クレタから小アジア、シリア、バビロニア、シュメルと神話や伝説をたどってみた。

太平洋戦争が始まってから十年の間私は古代学の進展について知ることをえなかったが、その頃私はアジアの古代文明に興味をもち空想的に伝説をたずね、メソポタミアの地から東方にすすみ、ベルシアからバミール高原の北方の溪流に沿ってタリム河畔にいで、黄河を下り、中国、朝鮮を通して、日本の九州や出雲に帰り、メソポタミアの葦原を開拓して麦を主とする農業を始めたと同じように、西日本で川沿いの葦原を稲田とし、神話や伝説を生ぜしめ、詩歌を生ぜしめるのを見た。あちこちと迷いながら私がたどった道は長く、たどたどしかったが、初めての道であって、興味深くつづけることができた。私は、西方では時代を溯り、東方では時代の流れに従ったが、とにかくこの道がシュメルで発生した古代文化、宗教、伝説等が東西に伝播し、交流した道であると信じる。

そのことを述べようとして、私はこの本で古代伝説や文学を採集するのみでなく、比較研究により、それらの伝説や文学の間に影響や共通点を見いだそうとつとめた。第一の共通点は熱と光と水とを与える太陽に感謝しつつ、その太陽が夕に西山に没し、朝に東山に復活し、春夏には北上して地上の生物を生育し、秋冬には南下して草木凋落の時となることを見て、人間の生死復活の理を考え、生命の木のような象徴をつくったこと、太陽が東の山に上る位置から種蒔きや耕作の時を定め、太陽のごとく万物に恵みを与え、人間のために働く英雄を崇拜し、この英雄の遭難や旅行や誉れを伝える物語を各国で生ぜしめたことなどである。私がこの本の後半に集めた形象や伝説や文学は、地方的に見れば、北緯三十度から四十度にいたる間、東緯二十度から百四十度の線内の古代世界に属するものであるが、それらの間には右に述べたような一致点が見いだされ、一系統の文化に属するものと思われる。私は今を去る五千年の昔から二千年にいたるまでの、この圏内における文化および伝説の交流の跡をたずねんとして、ここに集めた試論を書いた。北緯三十度以南の亜熱帯および熱帯地域、すなわちエジプト、アラビア、インド中央部と南部、東南アジアの文化は趣きを異にし、そこに伝説や文学の交流があったとしても、それは南部の交通路と海路とによって伝播されたらしく、日本は中央の道と、南方の海からの道とによって影響を受けたが、文化に関しては前者の方がはるかに重要である。

私はこの本で、芸術的形象または心象という言葉を彫刻、絵画、文学の本質をなすものとして用いたが、古代エジプト人の想像力は物体と精神とをひき離すことができず、動物の頭と人間を接合したような神々の形象を崇拜した。シヌメル人は人間を通じて神を見たので、初めから日神に人間的な形象を与えた。それらは金石に刻んだ画像であるが、クレタ人はそれによって情緒をも表現することができ、詩的心象として、万葉集の抒情詩を連想せしめるものが

ある。例えば第59図の春の女神を迎える画は、直接にはギリシアのバンドーラやコレーの神話に発展したであろうが、間接にその情緒は『万葉集』に見える多くの春を迎える歌と等しく、また第62図からは『万葉集』の七夕の歌を連想せしめる。

外国を巡遊した人が日本へ帰ったとき、かつては興味をひかれなかった風俗などに思いがけない意味を見いだすことがあるが、外国の伝説や文学に親しんだあとで、日本のそれらに接すると、私は多くの共通なもの、連絡したものを感ずる。

河津鳴く甘南備河にかけ見えて今かさくらむ山振の花 (巻八の一四三)

の歌からは、西域より到来の織物に表わされていた仙郷の絵を想い、穆天子を西王母の国に運んだ赤驥、盗驪、緑耳の天馬は

赤駒の足搔き速けば雲居にも隠り往かむぞ袖ふれ我妹 (巻十一の三五〇)

青駒の足搔きを速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける (巻一の三六)

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒 (巻七の三七二)

のような朝、昼、夜の駒の歌に影響しているように感じられる。

このような相似や共鳴は人間の社会生活進展の段階を等しゅうしていたことによるものであろうか。ギルガメシュやヘーラクレースの物語は行動の物語であり、クレタの芸術は美的情調の表現にすぐれ、ギリシア時代においては言語と思想とが発達し、哲学的反省が深くなった。オデュッセウス物語にしてもすこぶる理知的である。クレタの画像と万葉集の歌が、表現を媒介するものを異にしながら、相似共通のものをもつとすれば、それは心の成長がひとしく、

美的情緒のめざめる段階に達したためであらうか。

この問題に関し私は次のように考えた。アジア大陸で発生した文化の伝来がわが国の古代人に与えた刺激は第一に模倣を、第二に心のめざめをうながし、日本人の社会的生活の進展が、多少共通するところのある伝説や詩歌を生み出したであらうと。

『古事記』や『万葉集』の詩歌は明治以後西洋文学の進入に対抗せんがため、また政治や教育の目的のため特別の解釈を付せられていたが、太平洋戦争以後には反動として伝統は放棄せられ、「社会科学」的見かたから古代社会が解説せられた。私はアジアの古代文明を背景とし、日本古代伝説および文学の源泉を求め、ありのままにその真実を見ようと試みた。六世紀になって中国の古代文明と大乘仏教とが伝来するまで日本には文明の萌芽も見いだされないとこの学者もあるが、アジアにおける古代文明の萌芽であるタムムズの宗教に似たものが出雲やその他の諸地方において見いだされ、困難な治水工事が成功し、農村社会が発達し、そこから伝説や歌謡が生まれ、原始劇もあったことが認められるならば、二、三世紀頃から日本文明の萌芽が見られるとはいえないであらうか。私は詩的心象を古代詩歌の核心をなすものと思うが、「山振の歌」その他によって示したようにこの心象はこの歌が書かれるより古くから——神話伝説の時代から——生まれいで、はるか後の時代までも成長変化しているようである。私はかかる詩的心象を中心にして古代歌謡の伝統を見、理解を深めようとしたが、他方においては『万葉集』各巻および『人麿之歌集』などの時代、作者等についても従来の説に疑いをいだくようになり、これらの問題を追求してみた。

最後の一篇「ソロモンの歌」は、『古事記』における八千矛神やちひこがみの歌のように、タムムズ祭礼の際にうたわれた恋愛歌が、民謡となり、再び総合され、歌劇となったもので、古代文学の中に多い劇的表現の一例と思われるので、ここに

付録とした。これは大正十五年四月号の『思想』にのせたものであり、今回文体を改めようとしたが、思うにまかせず、古風な訳文のままにした。

その他の諸編の順序は、単純で短かい古代文学に関する試論をさきにし、複雑で広汎な文明および伝説の問題を取り扱った、やや長い二編を後にした。またこの中の多くはすでに講座或いは雑誌にのせたもので、今ここに再録することを許諾された出版社および編集者に対し感謝を述べる。それら再録の試論は左の通りである。

- 一 古事記に於ける詩的心象 平凡社『古事記大成』(第二卷) 昭和三十二年四月
- 二 比較文学と万葉集 平凡社『万葉集大成』(第七卷) 昭和二十九年十月
- 三 万葉集に於ける詩的心象の流転 平凡社『萬葉集大成』(第二十卷) 昭和三十年八月
- 四 詩的形象と上代及び中世 岩波書店『文学』 昭和三十三年三月
- 五 万葉集巻五について 平凡社『心』 昭和三十四年七月、八月
- 六 万葉集十三、十一、十二、七、十五巻の編集年代と各巻の特色 その前半、斎藤勇博士記念學術講演第二、(昭和三十一年一月)
- 七 文明と文学 岩波講座『日本文学史』(第十六卷) 昭和三十四年一月
- 八 ソロモンの歌 岩波書店『思想』第五十四号、大正十五年四月

目次

はしがき

『古事記』における詩的心象

- 一 『古事記』に用いられた言葉……………三
- 二 『古事記』に用いられた動詞の性質……………三
- 三 歌謡における詩的心象……………一七
- 四 神々の詩的心象……………三三
- 五 水、火、煙、雲……………二七

比較文学と『万葉集』

- 一 はしがき……………三
- 二 伝説的背景……………三一
- 三 女神の宗教……………三四
- 四 漢詩の影響……………三五
- 五 七夕の歌……………三七

『万葉集』における詩的心象の流転

四〇

一	はしがき	四
二	雲の詩的心象	五
三	月の詩的心象	六
四	人麿の歌における二、三の詩的心象	六
	詩的心象の流転と古代・中世	六
一	はしがき	六
二	山吹の歌	六
	『万葉集』諸巻の編集年代と編集者	六
一	はしがき	九
二	大伴坂上郎女と巻十三	一〇
三	大伴坂上郎女と古今相聞往来歌類	一四
四	巻七について	一三
五	晩年の坂上郎女と『万葉集』諸巻との関係	一七
	『万葉集』巻五について	一五
	『万葉集』におけるかな書き歌の系統	一八
一	かな書きの流行	一八
二	遣新羅使人の歌	一九

文明と文学……………104

一 アジア文明の起原……………105

二 極東文明の日本への移植……………111

三 日本の原始的農耕社会の発達……………119

四 文学の発生……………124

五 文明と文学の連続性と挫折、崩壊……………126

西アジア古代伝説……………126

一 はしがき……………126

二 古代の西アジアにおけるアジア人の文化……………126

三 山と水と木……………127

四 ギルガメシュ伝説と生命の木……………129

五 タムムズ伝説と生命の木……………131

六 「世界の木」と「生命の木」……………131

七 西方に伝えられたギルガメシュとタムムズ……………133

八 クレタの文化と生命の木……………135

九 ヘスペリデスの黄金の林檎……………136

一〇 パウサニアスの『旅行記』を通じて見たヘーラクレース……………137

一一 ギリシア宗教と植物……………137

目 次

一二	オデュッセウス(Odysseus)物語	三六五
一三	極東における太陽神後裔の旅行	三六三
a	はしがき	
b	『離 騒』	
c	『穆天子伝』	
d	田道間守と、ときじくの香の木実	
	ソロモンの歌	四一五

古代伝説と文学

『古事記』における詩的心象

一 『古事記』に用いられた言葉

詩的しんじょう心象とは比喩ひゆ的表現てきの幾種かである。詩的心象とは、それを表現する人が直接に経験する二つ以上のこと或いはものの心象が重なり合い、一つになった表現である。詩的心象は、時代により、個人により趣きを異にし、また『古事記』のそれと、『万葉集』のそれと、俳諧のそれとはいちじるしく相違している。

『古事記』における詩的心象を見んがためには『古事記』の表現に用いられた文体、その言葉の性質、その時代性等の観察から始めなければならないが、それがむずかしい仕事である。まず巻頭の一句「天地初発之時」を例としてみよう。現存する『古事記』の最古の伝本、真福寺本は一二六六年の古写本に基づき、一三七〇年転写されたものであるが、句点、反点、訓点なく、どうよんだかを推定する手がかりもない。僧侶の手によって書写され、寺院に秘蔵されていたことを考えると、経文を読むと同じく、「テンチシヨホツノトキ」と読んだかもしれない。『古事記』の訓み方は徳川時代に国学が起るに及んではじめて問題となったようである。

一四二五年書写された伊勢一本『古事記』には「天地初発テヒラケツ之時」のようによましめ、初期の刊本、寛永本、延佳本等は「アメツチノハジメテヒラクルトキ」とよましめていたが、本居宣長は『古事記伝』で、「アメツチノハジメノト

キ」とよませ、初発を「ハジメテヒラクル」とよむはひがことである、それは古代中国の天地開闢説（かいびやくせつ）と思ひ混じるからであると言っている。

『万葉集』を見ると、人麿も

天地之（あめつちの）初時（はじめのとき）之久堅（ひさかた）之天河原爾……（卷二の二七）

とうたっているので「アメツチノハジメ」という言葉はすでにできていたことは確かである。また赤人（あかひと）が富士山の詠を

天地之（あめつちの）分（わか）時（れ）従（とき）……（卷三の三七）

の句で始めているのを見ると、天地開闢の想像も一般に認められており、当時の人が、あらたまつてものを考えるときには、「混元」から始める傾向があつたこともうなずかれる。詩的心象の単純なものは比喩的表現であるとするとき、「アメツチノハジメノトキ」は単直な表現で、いまだ詩的表現になつておらず、「アメツチノハジメテヒラクルトキ」は一つの詩的心象である。語り部が伝誦した、日本の国土生成の神話はイザナギ、イザナミの命（みこと）から始められていたと信じられるが、安万侶（やすまろ）は更にさかのぼつて天地発生の神話から『古事記』を始めようとした。かれは『日本書紀』の編集にもたずさわつたが、書紀の巻頭には中国の『三五曆記』、『淮南子』等の説くところを合わせた開闢説をのせている。また安万侶が『古事記』を献上するときの上奏文の中に、「それ混元既に凝り（こ）、氣象未だ効れず（あつ）、名もなく、為（な）もなし、誰かその形を知らむ。しかして乾坤初めて分れ（わか）、參神造化の首をなす。……」と書き始め、「記するところは天地の開闢より始めて、小治田の御世に訖」と結んでいるところを見ると、安万侶が天地開闢の詩的（比喩的）心象をもつていて、それをここに表現せんと欲し、初発の語を用いたことは明らかである。「ハジメ」は抽象的な語で、心



第1図 法隆寺の玉虫厨子に描かれた須弥山

日本に伝わった宇宙創造の詩的心象であるかも知れない。「混元」(カーオス)より天と地とが分かれたれ、光と闇とが昼夜に分かれたれ、日と月とが生まれ、シユメル、崑崙こんろん、オリュンポス、ペレザイティ、高天原等々の名でよばれる霊山がもり上がって、日月の天を支え、神々の集まるところになったとの宇宙創造の神話は、五千年の昔メソポタミアに生じ、四方に伝わり、日本にも伝わったらしい。

「古天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌として鷄子の如く、溟滓くもりに牙まきしを含めり。其清陽なるものはたなびきて天となり、重く濁れるものは淹滞つよまて地となる……」

の『日本書紀』の発端をなす鷄子説の詩的心象も仏教の經典中に見いだされるものであるが、安万侶は、この『古事記』の発端の一句においては、大乘仏教的心象の影響を受けていて、書紀巻頭の句と同一心象を背景としていたかも

象にはならないが、「発」の古文字は弓に矢をつがえ、伐の字をのせた形で、静より動に入ることを意味し、「ハナツ」「ヒラク」「オコル」と訓み、安万侶は「万物之妖尽発オオル」「向日向発オタル」「於國中烟不発オケス」のように用いている。「初発」の語はやまと言葉ではなく中国人や日本人の書籍に見当たらない。山田孝雄博士によると、「初発」の語は涅槃經ねはんぎょうその他仏教の經典の中にあることであるが、そうすると、この語はメソポタミアからペルシア、西北インドを経て、大乘仏教とともに